

「素材」から食を勉強する



初回にゲストで訪れたジョン・ムーア氏による「3D、4Dで考えよ」という、「食」だけにおさまらないスケールの言葉からはじまった「食ゼミ」。2015年度に行う後半5回も、醤油／野菜工場／屠殺／塩／糖質と、食にまつわる「ものさし」磨きに役立つ、興味深いテーマが続々です。終了後には、ゼミ生のレポートも含めた記録冊子を制作予定。合わせてお楽しみに。

+クリエイティブゼミ vol.13 「食」編

「神戸発：自分で食べる“食”的勉強をしよう！」

→ゼミマスター：米山雅彦(パンデュース)
~2015年5月30日(土)

フラワーロードの新しい楽しみ方



3月14,15日、柴幸男(劇団ままごと主宰)+NO ARCHITECTSによる「まち歩きでつくる小説と地図」ワークショップを開催しました。三宮～KIITO間の通り道・フラワーロードをまち歩きして、「気になるもの／こと」を集めて地図を制作。見どころが集まつた地図は壮观の一言！そこから短い小説を作りました。この成果物をもとに、柴さんが新作戯曲のテキストを制作します。KIITOへの道のりがまったく違って見えるかも。

KIITOアーティスト・イン・レジデンス

柴 幸男+NO ARCHITECTS

→2015年春 新作戯曲完成予定

つくってみると、見る目が変わる



普段何気なく使っている身の回りのもの。それらがつくれられるプロセスは意外と知らないものです。このワークショップではスツールを昔ながらの構造でつくります。ノコギリを使って座面を切り出し、くさびを打ち込んで脚を接合、そして紙やすりでの仕上げ作業。全て手作業で行います。ものの出来上がる工程を身体を使って知ることで、その価値を作り手の想いを体感してみましょう。

ものづくりワークショップ

うたたね 山極さんと、スツールをつくる。

→2015年4月12日(日) 10:00 ~ 16:00
参加費5,000円、要申込、定員15名(先着順)

今年も開催！ KIITO マルシェ



気軽にクリエイティブに触れられるワークショップ、飲食ブースなどがKIITOの広大なホール空間に並ぶ「KIITO マルシェ」、昨年に引き続き開催します！この日は、ポートアイランドにある小児がん専門治療施設「チャイルド・ケモ・ハウス」をPRする、チャイケモチャリティーウォークのゴール地点にもKIITOになります。歩く・楽しむ・支援する、充実の一日を！

KIITO マルシェ

→2015年6月6日(土)
11:00 ~ 16:00(予定)

COVER STORY

KIITOの住人と

431号室 バニラシティ株式会社 森田敦雄さん



2/21に行った濱口竜介監督映画「ハッピー・アワー」編集ラッシュ公開上映の設営と当日運営を、イベント企画・制作・運営が専門のバニラシティさんにお願いしました。催事のスムーズな運用を支えてくれる縁の下の力持ちがKIITOの中に、とっても心強いであります！

ACCESS



阪神・阪急/JR
神戸三宮/三ノ宮
そごう
三宮センター街
国際会館
三宮・花時計前駅
地下鉄・海岸線
頭上公園
神戸市役所
フラン
東遊園地
歩道橋
至明石
P
みなとのもり公園
JR
川西新港
三井新港ビル
KII+O
三井住友
阪神神戸三宮駅、阪急神戸三宮駅、JR三ノ宮駅よりフラワーロードを南へ徒歩20分、国道2号線を越えた神戸税関東向かい。

神戸市営地下鉄海岸線三宮・花時計前駅より徒歩10分
ポートライナー貿易センター駅より徒歩10分
※駐車場はございませんので、公共交通機関をご利用ください。

KII+O: KIITO NEWSLETTER VOL.009 by DESIGN AND CREATIVE CENTER KOBE

2015年3月発行 発行：デザイン・クリエイティブセンター神戸
編集：竹内厚[Re:S] / アートディレクション・デザイン：寄藤文平+北谷彩夏[文平銀座]
写真：林口哲也(p.1 ~ 3)、大塚杏子 (からもも)、p.3ワークショップ風景

CONTACT 〒651-0082 神戸市中央区小野浜町1-4 TEL:078-325-2235 FAX:078-325-2230 E-mail:info@kiito.jp URL: http://kiito.jp

[キート] デザイン・クリエイティブセンター神戸 様より
KIITO NEWSLETTER VOL.009

KII+O

TAKE FREE VOL.009

アサツテ

アカシ

今回は

Kaksi design

エロディ・ヴィーチョス
ギヨーム・グランジョン

明後日デザイン制作所

近藤聰



エロディ・ヴィーチョス
ギヨーム・グランジョン
Kaksi design
総合デザインスタジオ

グラフィックデザイナーのエロディ・ヴィーチョス(Élodie Vichos)、プロダクトデザイナーのギヨーム・グランジョン(Guillaume Granjon)の二人が運営する総合デザインスタジオ。ともにフランス、イギリス、カナダで学び、2012年には当時「世界デザイン首都」であったヘルシンキに居住、2013年にサンテティエンヌデザイン・ビエンナーレ事務局で働いた後、サンテティエンヌにスタジオを設立した。<http://kakside.com/>

■KIITOとの関わり歴
2015 こどもデザイン・ワークショップ 講師

asatte
近藤聰
明後日デザイン制作所
グラフィックデザイナー

1976年大阪府生まれ。神戸大学発達科学部卒業、IMI(インターメディウム研究所)卒業。明後日デザイン制作所代表。解くべき問題の発見を重視し、グラフィックを中心としたデザインによる解決を目指す。神戸芸術工科大学、京都造形芸術大学非常勤講師。<http://astt.jp/>

■KIITOとの関わり歴
2012 「ちびっこくらべ」デザイナーチーム協力クリエイター
(2014も継続)
2015 +クリエイティブゼミ 講師(久慈達也さんと共同)
KIITOアーティスト・イン・レジデンスのフライヤー等、印
刷物のデザイン多数

Q7 2組の頭の中をちょっとだけ覗き見する、7つの質問。どんな違いが出るでしょうか?

Q1. 神戸で起こった印象的な出来事 Q2. 好きな食べ物 Q3. 行ってみたい場所 Q4. ついついやってしまうクセ Q5. 最近気になる人 or ものと Q6. KIITOでやってみたいこと Q7. これからの予定

A. Kaksi design の Answer



A. 近藤聰さんの Answer

A1. 独立開業
A2. えのき
A3. サンテティエンヌ
A4. 文字校正
A5. 自宅の照明計画
A6. ホールでフリスピーキング
A7. 空いてます(笑)

asatte design Satoshi Kondo × Kaksi design Élodie Vichos & Guillaume Granjon



その街に暮らす人にとつての デザイン都市つて?

近藤 カクシデザインという名前、実は日本語としても意味が通じるんですよ。

エロディ そうなんですか、それは知りませんでした。

「カクシ」というのは、数字の「2」を表すフィンランド語で、音の響きがよい言葉を探していたのと、私たちが2人組で、プロダクトとグラフィックの両方を仕事にしていることから選びました。

近藤 私も「明後日」という名前は、音の響きを考えました。明日に向かってデザインをするというよりは、そのもう一步先を見越してデザインをしたいという気持ちもあります。「明後日の方向」といえば、ちょっと間の抜けたニュアンスになるのですが、その点も面白いなと思っています。

ギヨーム 将来に向かうような意味はいいですね。

近藤 ありがとうございます。おふたりともフランスの国外でデザインの勉強をされてきたのでしょうか。

エロディ 私たちは、実は中学校の同級生なんですよ。

したよ。海や山が近くにあって、気分にあわせて景色を変えられるのもいいですね。サンテティエンヌはもつとフラットな感じです。

近藤 街が立体的だというのは面白い視点だと思います。同じものを見ているのに、感じ方が違う。見方を変えしていくことができれば、自分が関わる隙間みたいなものが神戸にもたくさん残っているような気がします。

エロディ サンテティエンヌは炭坑の街だったこともあって、「プラックシティ」と呼ばれるなど、これまであまり良い印象をもたれていました。そうした街のイメージを変えようと、市はデザインを前面に打ち出したまちづくりを行ってきたんです。ユネスコの「デザイン都市」にも認定されて、今ではデザインが街のアイデンティティになっています。

近藤 デザインを仕事をしてはどうですか。私は、もともと大阪のデザイン事務所に勤めていたのですが、4年前に独立するときに、神戸を拠点として選びました。でも、それは「デザイン都市」だからということではなく、そのときに暮らしていった場所が神戸で、たまたま友人に場所を貸してもらえたという縁があったからです。実際、仕事の依頼も、神戸以外のクラライアントの方が多かつたくらいです。

ギヨーム 私たちはふたりで事務所を始めてまだ1年なので、企業の仕事はそれほど多くなくて、行政の公募事業が仕事の中心になっています。大きな企業はサンテティエンヌよりも、電車で1時間くらい離れたりヨンにあります。ただ最近では、リヨンに出ていたデザイナーたちがサンテティエンヌに戻ってきているようです。「デザインの街」として周りからも認められつつあるのでしょうか。

近藤 街の人たちは、自分たちの街がユネスコの「デザイン都市」になったことをどの程度認知していますか。神戸ではまだまだ知らない人のほうが多いかも。

エロディ 「デザイン都市」の認定を受けるとき、市は街の人々とのコミュニケーションをとても大切にしています。向こうにもKIITOにあたるようCité du Designという施設がありますけど、そこでおこなわれる展覧会も、「サッカー」のような、一般的人が親しみやすいようなテーマが選ばれています。街で開催されているデザイン・ビエンナーレは、子ども向けのプログラムも多いですし、家族みんなで楽しむイベントになっています。

ギヨーム Cité du Designの中には、デザイン専門学校も入っているんですよ。小学校や保育園の改装にもデザイナーが関わっていますので、建物の模型を作ったり、色の効果を学びながら、自分たちで色を提案したり。生徒がデザイナーと一緒に改装を進めるんです。

近藤 それはデザインを身近に感じながら育っていくことになりました。

エロディ いろいろな国での経験があるんですね。日本へは初めてだそうですが、神戸の印象はいかがですか。

ギヨーム 空間を活用しているということを強く感じます。空の上を走っているような道路には驚きました。

近藤 そうなんですね!

エロディ ギヨームはデザインの勉強のため、1年間イギリスに留学していましたが、私も一緒にいました。その後、私はカナダへ交換留学で行きましたけど、今度はギヨームがカナダについてきて(笑)。

近藤 ほんとうにずっと一緒なんですね(笑)。

エロディ なるべく一緒にいられるように努力してきました。2012年はフィンランドで暮らしていたのですが、サンテティエンヌのデザイン・ビエンナーレ事務局からアプローチをもらって、地元に戻って活動することにしました。

近藤 いろいろな国での経験があるんですね。日本へは初めてだそうですが、神戸の印象はいかがですか。

ギヨーム 空間を活用しているということを強く感じます。空の上を走っているような道路には驚きました。



2都市にある建物や動物を組み合わせて作った図案をプリントするワークショップ
これができます。大人にとってももちろんそうですが、小さい頃から、自分事としてデザインに関わる機会があるのは、とても大切なことです。

ワークショップは遊びか それともデザインなのか

近藤 おふたりは今回、KIITOで子どもたちとワークショップを開催されました。神戸とサンテティエンヌのランダマークを組み合わせて絵を作る、とい

う興味深いものでしたが、普段から子どもたちとのワークショップを行われているのですか。

エロディ そうですね。市の公募事業に参加して、年間10回ほどワークショップをやっています。地元に

戻つてすぐの頃は、そんなに多くはなかつたのですが、だんだんと信頼してもらえるようになって(笑)。

エロディ フランスの子どもと日本の子どもの反応は違いましたか。

近藤 いたのかもしれません(笑)。静かでとてもお行儀が良かつたです。フランスだと、もっと騒々しくしてしまったか。

ギヨーム 子どもたちは、はじめ僕のことを怖がつてましたのかかもしれません(笑)。子どもたちは作業に取りかかるのも

スムーズでした。

エロディ そうね、集中力があつて、丁寧に良いものを作ろうとしてました。日本の子どもたちはとても器用。今回のワークショップではカッターナイフを使いましたが、フランスでやる場合は危ないのでハサミしか使いません(笑)。

近藤 子どもたちは、やってることがデザインだという意識があるでしょうか。それとも、単に楽しく遊んでいるだけだと感じますか。

エロディ ワークショップをやるとときには、まず丁寧に話をするようになります。デザイナーがどういう仕事をしている人なのか、これから自分たちが体験するのはどうなことなのか。それらを子どもたちがよく理解できるようになります。

エロディ 近藤さんはどのようにワークショップに取り組んでいますか。

ギヨーム 実際、子どもたちがワークショップの時間だけで、デザインについて理解できているかはわかりません。だけど、彼らがいかに大きくなつたときに、理解してもらえると思っています。

エロディ 近藤さんはどのようにワークショップに取り組んでいますか。

近藤 自分からワークショップを企画したことではないのですが、依頼を受けて、中学校などへ行く機会がありました。子どもたちと一緒に何かする機会があるときには、私は「デザインは特別なものではない」とい

ういう関係性に目を向けてほしいと思っています。

エロディ 私たちもワークショップで生まれた人と人のつながりを大切にしていますし、子どもたちにもそういう関係性に目を向けてほしいと思っています。

ギヨーム 自分で何かを作るという体験を通して、日々の生活で手にしている物も、実は誰かが作ったものなんだということに気がつききっかけになればうれしいですね。

通訳:野崎亜理沙 構成:久慈達也 (DESIGN MUSEUM LAB)